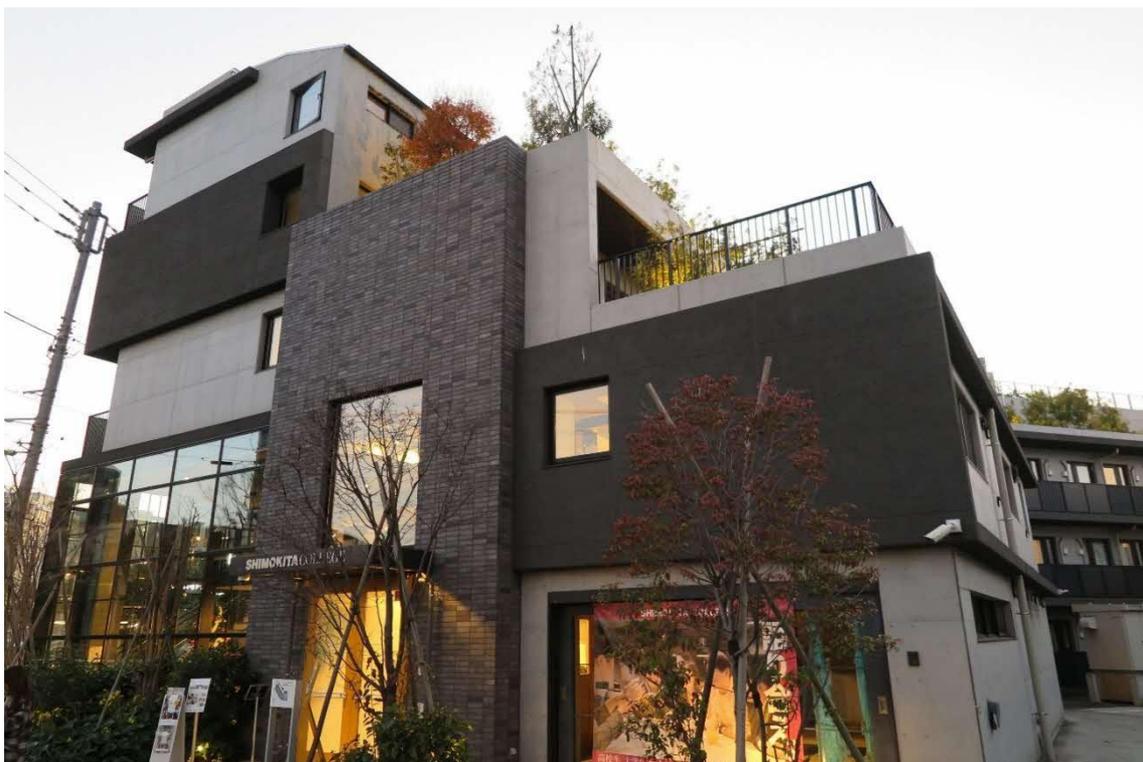


下北沢から生まれる新しい「暮らし×学び」 ——SHIMOKITA COLLEGE (シモキタカレッジ) ——

みなさんは「暮らしながら学ぶ」住まい方を想像したことがありますか？
近年、生活と学び・仕事を柔軟に結びつける新しい居住スタイルに注目が集まっています。

今回ご紹介するのは、東京・下北沢にある SHIMOKITA COLLEGE (シモキタカレッジ)。

ここは単なるシェアハウスではなく、共に暮らす人たちの経験と知見を日常の中で交換し合いながら学び合う、革新的な居住型教育施設です。今回の取材では、事業責任者の原田遼太郎さんに、シモキタカレッジの魅力や背景についてお話を伺いました。



シモキタカレッジとは？

シモキタカレッジは、2020年12月に東京・下北沢の「下北線路街」に開業した日本初のレジデンシャル・カレッジです。鉄道の地下化で生まれた広い跡地を「ただの商業施設にしない」という思いから、街に長く関わる人を育てる拠点としてつくられました。

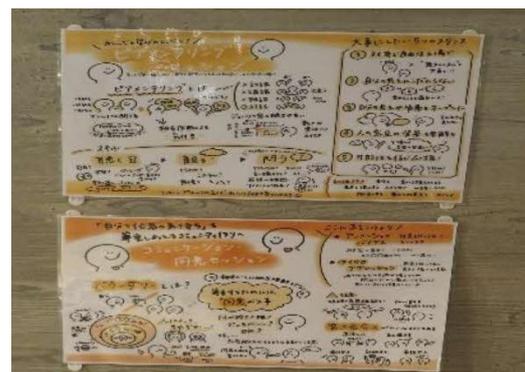
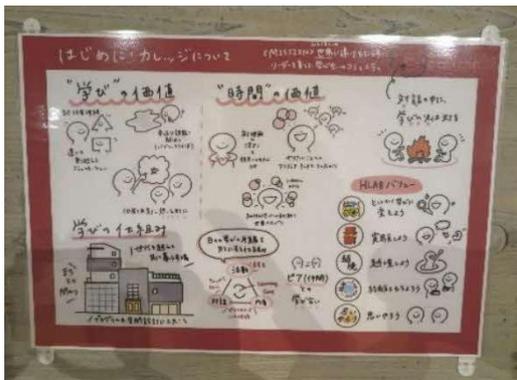
ここには、高校生・大学生・社会人など、多様な背景を持つ人たちが集まります。年齢も学校も職業も違う人たちが、同じ屋根の下で暮らすことで、自然と価値観が混ざり合うように設計されています。

原田さんはこう話します。

「授業で得た知識をそのままにせず、帰宅後の何気ない会話の中で深めていく。そんな”生活と学びがつながる体験”をつくりたかったんです」

この“暮らすこと＝学ぶこと”という考え方は、イギリスやアメリカの全寮制大学の思想を参考にしているそうです。

この施設の大きな特徴は、「暮らすこと＝学ぶこと」を一体化させている点。単なる共同住宅や学生寮ではなく、暮らしそのものが学びのフィールドとなるように空間設計やプログラムが練られています。



カレッジやコミュニケーションに関するグラレコ

共同生活が生む学びと出会い

シモキタカレッジでは、日常の中で自然と交流が生まれるよう、ハード（設備）とソフト（仕組み）の両面から様々な工夫が凝らされています。

【ハード：交流を誘発する空間設計】

- 必ず人と出会う動線

建物に足を踏み入れると、まず大きな食堂が現れます。自室に戻るまでに必ず誰かと顔を合わせる設計になっており、日常的な挨拶や会話が生まれやすくなっています。

- 「待ち時間」を交流に

4階のランドリー前にはパブリックスペース（ラウンジ）が設置されています。これは、洗濯を待つ間のちょっとした時間に居住者同士が交流することを狙ったものです。

- 多様な共用部

ラウンジや学習スペースなど、プロジェクトや学びが生まれるきっかけとなる場所が随所に配置されています。

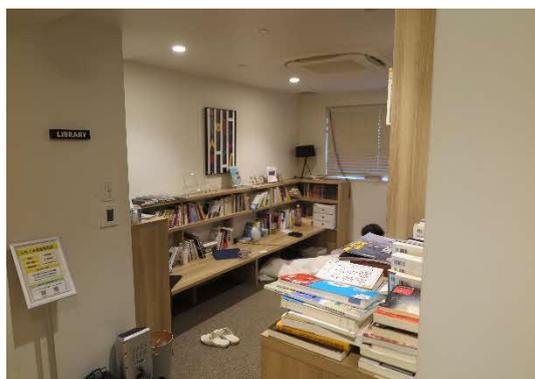
原田さんはこれを「偶発的な交流を計画的にデザインする」と表現します。



1階 エントランス・食堂



2階 共用部



3階 ライブラリー



4階 ランドリー前ラウンジ



屋上 テラス

【ソフト：コミュニティを育む仕組み】

- 安心して関係を築くための「ハウス」制度

居住者は「ハウス」と呼ばれる7つの小グループに分かれています。1つのハウスはだいたい15人程度。各ハウスには社会人居住者2名が「チューター」として、さらに学生から選出された「ハウスリーダー」がいます。チューターは生活面の相談に乗ったり、ハウスの雰囲気づくりを、ハウスリーダーは、同世代の視点からコミュニティをまとめる役割を担っています。

- 自発的な仕掛け

100名を超える多様な居住者が属性を超えて繋がれるよう、Slackを活用した「コーヒーチャット」（通称「コヒチャ」）という制度があります。毎週月曜日にシステムがランダムにペアを作り、その週のうちにコーヒーを片手に短時間で雑談を楽しむというものです。あえて目的のない「雑談」をシステム化することで、通常的生活動線では重ならない高校生と社会人の対話などが日常的に生まれ、新しいアイデアの創出や自身のキャリアを再考するような深い学びの土壌となっています。



カレッジの学びのエンジン



イベントの記録

下北沢という「街をキャンパスに」

シモキタカレッジでの学びは、建物の中だけでは終わりません。ここでは、下北沢という多様な文化が混ざり合う街そのものをキャンパスとしてとらえています。

地域と連携したイベントの企画、子ども食堂の運営、カレッジ文化祭の地域への開放など、街の人と関わる機会が日常的に用意されています。こうした活動を通して、居住者は「街の一員」としての感覚を育てていきます。

こうした取り組みの背景には、事業全体を統括する小田急電鉄の“街づくり”の視点もあります。学生時代に良い体験をした街には、将来また戻ってきやすい—そんな考え方が、このカレッジの設立にもつながっています。実際、沿線に住み続ける卒業生が増えたり、下北沢で新しい住まいをつくる卒業生も現れています。

” ナナメの関係性” が育てる学び

原田さんが特に大切にしているのが、「ナナメの関係性」という考え方です。親でも先生でも同級生でもない。でも、同じ屋根の下で暮らす仲間。

「隣の席の子が急に勉強し始めると、自分もやらなきゃと思う。そういう”近いロールモデル”が一番効くんです。」

高校生が大学生に影響を受けたり、大学生が社会人の働き方を知ったり。そんな日常の積み重ねが、居住者の価値観や進路に大きな影響を与えています。

編集後記



加藤

シモキタカレッジの魅力は、「暮らすこと」と「学ぶこと」を分けずに日々の生活の中で両者を結びつけることができる点にあります。多様な人々との出会いが、思いがけない発見や新しい価値創出につながり、新しい自分に出会える—そんな生活がここにはありました。暮らし方や学び方が多様化する今、自分の生活を「学びのキャンパス」にするという選択肢は、これからの都市生活の新しいあり方かもしれません。ぜひあなたも、自分らしい暮らしと学びを考えてみてください！



取材にご協力いただき、ありがとうございました！